

諫早の人

澤田 悟

私の手元には陽に焼けて色褪せた一冊の本がある。小口には黴やシミが浮いているが大切な一冊である。

題名は「諫早菖蒲日記」

作者は野呂邦暢（のろくにのぶ）。昭和五十二年四月に出版されている。当時私は富山の田舎町で自動車整備工をしていた。町の小さな本屋で購った場面を鮮明に思いだすことは出来ないが、機械油の染み込んだ傷だらけの手を期待に胸躍らせて伸ばしたことだろう。

同じころ「諫早菖蒲日記」を手にして一読大きな影響を受け、作者に手紙を書き「君の豊饒な未来に期待する」という返事を貰った人がいる。それをきっかけに小説を書きだした。2017年「月の満ち欠け」で第157回直木賞を受賞した作家の佐藤正午氏だ。

偶然だが佐藤氏とは同年齢だ。私と同じ感動を同時期に感じた人が他にもいた

のだと、後年そのエピソードを知りある種の感銘を受けた。

野呂邦暢は今ではほぼ忘れられた作家である。書店で（書店そのものが減りつつあるが）野呂邦暢の作品を見つけることは容易ではない。一部の人気作家、ミステリーや刺激的で「痛い」ストーリーや「温もり」や「食」などに特化した作品以外売れない時代だ。芥川賞などよく知られた賞を取った本、話題になった本以外は書店に並ぶこともなく消えていく。といってそれらの作品に価値がないわけではない。野呂の残した作品は今も輝きをはなっている。なかでも「諫早菖蒲日記」は氏の初めての歴史小説として、豊穣な世界を描き出して見せた記念碑的な作品だ。

詩的で静謐だが、内省的で孤独感が漂う作品を多く書いてきた野呂が見いだし

た生への喜びに満ちた作品だった。その「諫早菖蒲日記」はどのようにして生まれたのか。

忘れられたと書いたが一部の熱意ある人々の努力で文遊社から「野呂邦暢小説集成」全九巻が出版されている。随筆もみずず書房より「野呂邦暢随筆コレクション」として出版されているが多くの人の目には触れにくいのが現状だ。

文芸評論家、篠田一士は

『諫早菖蒲日記』これは、もう文句のつけようのない名作で、この一作で野呂邦暢の名前は現代文学史に長く記憶されることは、まず間違いない」と書いた。車谷長吉は「私は自分の古里を描いた作品で一番の傑作だと思うのは、野呂邦暢の『諫早菖蒲日記』である」と書いた。当時車谷は京都の料理屋で下働きをして

いた。本など読む暇はなかったが、本屋でこの本を立ち読みし、文章の美しさに思わず衝動買いをしたそうである。仕事が終わる夜に街灯の下にたったままむさぼり読んだとある。「私はこの本を読むことで生き返る思いがした」と書いている。それほどまでに文人たちが高く評価

した理由はどこにあったのだろうか？

野呂邦暢は諫早の人である。

長崎市に生まれた。本名納所邦暢（のうしよくにのぶ）昭和十二年九月生まれ。父の招集により叔父叔母の住む諫早へ転居する。疎開だった。昭和二十年二月のことだ。六か月後、長崎に広島に次いで二発目となる原爆が投下された。生家は爆心地から八百メートルの場所にあった。原爆が長崎に投下されその炎で市街が焼かれていくのを野呂は諫早で見た。その後、同級生と会うことはほとんどなかったという。

以後、野呂は諫早で暮らし続ける。わずかな期間を除き、そのほとんどを諫早の地で物語を書き続ける。かれの作風、特に芥川賞を受賞するまでの作品からある種の孤独感を受けるのはそのせいかもしれない。京大受験に失敗し、その後数々の職につくが長続きせず、生活に困窮することも多かったという。挫折を経験して書きだしたのだ。

諫早高校卒業後、野呂は京都で浪人生活を経験するが、父が事業に失敗し入院

する。そのため大学入試をあきらめて帰郷。さまざまな職業に就くが不況下であり地元では満足な職を得られず上京して友人宅に下宿しつつガソリンスタンドの店員や喫茶店のボーイ、ラーメン屋の出前持ちなど多くの職に就く。自衛隊に入隊したのも不況が影響していたと思われる。そのような経験のちに野呂の地道な創作活動を支えたと言えるだろう。年譜には除隊後帰郷して家庭教師をしながら創作を続けたとある。鬱々たる思いを抱きながらであったろうと思われる。

野呂の作品がようやく雑誌に掲載されるようになったのはおよそ七年後である。二十八才の時「或る男の故郷」で文學界新人賞佳作に入選する。地道な創作活動が実を結び世に認められたのは自衛隊に入隊した当時の体験を小説化した「草のつるぎ」で芥川賞を受賞したのちだ。候補になること五回目での受賞だった。その後、野呂はほとぼしるような勢いで作品を発表し続ける。

当時私は雑誌「文學界」に掲載された「草のつるぎ」を読んで感銘を受け、その後書店で見つけた「諫早菖蒲日記」に

ためらいなく手を伸ばしたのだった。

昭和五十五年五月死去、四十二才。芥川賞受賞後約六年という短い活動期間だった。

諫早は古くは「伊佐早」と呼ばれ後に「諫早」と改められている。長崎県の中央部に位置し、周囲を有明海、大村湾、楠湾の三つの海に囲まれ長崎県の交通の結節点としての役割をはたしている。北には太良山系の山地が聳え、西は長崎半島、南は島原半島の付け根にあたる。大村湾、有明海、諫早湾、楠湾の三つの海に囲まれてもいる。諫早湾は古くから干拓が進められ、野呂はその反対運動に参加していた。

野呂は諫早を「地峡の町」と呼んでいた。地形的にそうなのである。それは地方へと文化がもたらされるときに必ず通る地でもあった。当時珍しい地方在住作家として彼は得難い文化を中央に発信し続ける。当時地方在住の作家は他には丸山健二など少数だった。

山口在住の芥川賞の候補にもなったことのある作家、長谷川修宛の書簡でたびたび上京したいと書いているが実現する

ことは無かった。野呂は諫早の地にとどまり独自の文学を書き続けた。

「諫早菖蒲日記」は野呂のはじめての歴史小説である。昭和五十二年度の谷崎潤一郎賞の候補作に選ばれているが受賞はならなかった。

三十四才で結婚し転居した先が偶然にも諫早藩の砲術指南役の娘が住んでいた家だったことが、はじめての歴史小説がこの世に誕生するきっかけになった。家主から土蔵に古文書が仕舞われていることを知り、見せてもらったことから発想を得る。その顛末は本書のあとがきに記されている。

野呂は一読興味をもち所蔵されていた古文書だけではなく、諫早についての史書も読み漁った。三年間、書きあぐんだという。はじめての歴史小説ということもある。氏がそれまで自分に近い世界を描いてきたという経緯もある。百二十年前に生きた人々を描くための、三年は準備にかかった期間だといえるだろう。

その間に氏は登場人物たちが交わしたであろう話し言葉の再現に腐心する。当

時の人々、武家の、市井の人たちが話した言葉がどうであったか再現しようとした。明治時代生まれの祖父母の語る言葉はまだ記憶にあり、その話しぶりをもとに会話を想定した。

野呂は歴史小説の登場人物がみな標準語を喋ることに疑問を持ち調べている。「登場人物が口にする言葉には血と土の匂いがする。(中略)言葉に命を感じられずに何の歴史小説ぞという思いが私にはある。」と随筆「はじめての歴史小説」のなかで述べている。野呂らしい想いでありそこに感慨を感じる。

芥川賞受賞作「草のつるぎ」執筆時石牟礼道子の「苦海浄土」を参考にしたいという。

諫早は江戸時代佐賀鍋島藩の支藩だったせいか、距離的に近い長崎より佐賀の言葉に似ているのだそうだ。

野呂は地元の「諫早文化」七号に寄せた「諫早菖蒲日記のこと」のなかでこう書いている。

「小説(諫早菖蒲日記)は八割方フィクションである。(中略)私は取り掛かる前に、諫早市史全四巻を再読三読して実

は途方にくれた。お家騒動があるわけではない、幕末に諫早藩が歴史的に重要な役割をはたしたこともない。事件らしい事件もないのである。小説に仕立てあげる材料が見当たらない。」そして「としをとったせいか諫早の昔のことに興味を覚え、一冊の本を書いたというだけのことである。せんじつめればそうなる。

(中略)ただの回顧趣味で小説など書けるものではない。かつてこの地に生き、今は一基の墓と化したもろもろの人々を私は作品の中でよみがえらせた。筆をおいた今、私はこれらの作中人物とふたび会うことは無い、それが少しつらい。」ともあれ氏は偶然にもおとずれた幸運を活かして初めての歴史小説をものにした。

作品は刊行の前年、雑誌「文学界」に第一章が「諫早菖蒲日記」、第二章が「諫早舟唄日記」、第三章が「諫早水車日記」と題して掲載され、翌年四月に一冊にまとめられて出版された。カバー絵に菖蒲の花が描かれた瀟洒な造りの一冊である。カバーを外すと表面には影絵のような黒船のシルエットが描かれている。裏面には洋式小銃が描かれた絵馬の絵が

あしらつてある。私はこれまでカバーを外してみることもなく、この評論を書くにあたって何気なく外してみて気づいたのだった。表の見返しには江戸時代の諫早藩を中心とした九州の古地図が印刷され、裏の見返しには諫早旧城下図が印刷されている。物語の展開を地図で追ってみることもできる。

帯には「幕末——砲術指南の十五歳になる少女のみずみずしい青春の感性を透明な文体で描く 純文学長編！」とある。その短い文は作品の本質をつく紹介となっている。純文学で歴史小説は少ない。

最近純文学という分類は大衆文学だの娯楽小説だのという仕分けとともに使われなくなってきたが、ひとつの指標としてみるなら最近の芥川賞の受賞作に歴史小説は見あたらない。直木賞には数多く見られるけれど、これも本書の特徴の一つである。

「諫早菖蒲日記」はいわゆる日記体の小説ではない。「〇月×日 私は……」という形を取ってはいない。武家の娘とはいえ当時の人々が今のように気軽に日記をつける習慣はなかったかもしれない。

つれづれに主人公が目にした事、聞いたことなどがつづられている。

主人公は砲術指南役藤原作平太の娘、志津だ。安政二年の初夏から翌年春までの彼女の目につる諫早の自然や人々の営みが描かれている。大きな出来事や歴史に残る事件はおきない。それでも一読心惹かれるのは、そのみずみずしい（帯の文章を借りれば透明な）文体で描かれた当時の日常が、執筆当時およそ百二十年前の江戸時代の人々とは思えないほど自然に描かれ心に迫ってくるからだろう。

江戸時代の人々の生活はいつたに貧しくつましかったようである。それは武士の家庭であっても変わらない、いや禄を食む武士であるからこそより貧しくつましかった。

藤原家のもともとの禄高は七十石。それが藩の財政ひつ迫に応じて減らされ続け作中では四十石になっている。主な理由は西洋の脅威にそなえるために新式の武器鉄砲を購うためである。そのことは父作平太の願うところでもあるが、皮肉にも自らも生活苦に追われることになる。

幕府のお台場の砲台建設でも藩の財政

は苦しめられ、作中では四十石からさらに二割削られている。そのため志津は楽しみにしていた新しい矢絰の夏物の単衣も我慢させられる。少女の身にも、黒船が訪れ開国を迫る西洋の脅威や時代の移り変わりは否応なく押し寄せてきている。

志津は十五才になったばかり。母から男であれば元服を迎える年であると厳しく躰けられるのだが、潑刺とした若さが抑えられない。好奇心に飛んだ行動力がある。それらが作中にあふれている。あかるく健康的な爽やかさを感じさせる。

「しかし、単衣の襟元からのびこんで肌をくすぐる風、袖口から這入ってわきの下や胸を撫でる風の快さは今年のものだ。路ばたに木漏れ日を振りまいている楠の葉むれのなんというみずみずしい青さ。去年も同じ風に吹かれ、同じ楠の若葉を見たのに、あたかも初めて目にするものようである。

何を見てもこのごろは気が弾む。さらさらと輝く路上の砂にたったいま水がまかれ、黒と白の縞模様を織り出している。川面はいちめんに波立ち、玻璃のような光を放つ。ありふれたものを見ているの

に、この世のものとは思えない美しさを
おぼえて、ゆえもなく私は胸をときめか
す。」

引用が長くなつたが、そのように彼女
の目に写るのは、感じるのは彼女が素直
な性格とあふれるような若さをもつて描
かれているからだろう。

砲術指南役の娘が住んだ旧家に野呂が
移り住んだのは、野呂の結婚後である。
新居として住んだ家に小説の得難い資料
が埋もれていた。

芥川賞を受賞し世に認められた。さら
に新婚生活の喜び。弾みそうな勢い、躍
動感が「諫早菖蒲日記」に影響をあたえ
ているのは想像に難くない。美しい物を
美しいと感じ、生を肯定的にとらえる人
だったのだと、本書を読んでその表現か
ら感じさせられる。

安政二年は西暦1855年、ペリー提
督ひきいる四艘の黒船が江戸に現れてか
ら2年後である。その後桜田門外の変、
生麦事件、薩英戦争、大政奉還と続き、
十三年後に時代は明治へと変わる。その
予兆のようなものは本作のなかにも遠雷
のように響いている。事実その年の春ま

でフェートンひきいるイギリス船が長崎
港に寄港しており、佐賀藩から命じられ
て父作平太は物語がはじまる直前まで長
崎にいた。時代に影響され変化を強いら
れる砲術指南役の娘であるからこそ気づ
くこともあつただろう。

だが志津が直接出会い目にするのは身
近な日常生活での出来事ばかりだ。仲間
の吉爺と出掛けた狸掘り（両側に開いた
狸穴をふさぎ、杉を燻して中間部を掘っ
て狸を捉えるのだという）であり、下女
のとらと行った川辺の芹摘みなどだ。藩
政を、国を動かすような出来事はみな父
や母あるいは吉爺らから聞いた話である。
それについて作者は工夫を凝らしてい
る。石火矢の調練で父作平太の耳は遠く
なり尋常の会話では聞こえにくくなつて
いる。だが娘の志津が耳元で話すと聞こ
えるという。そのため志津はおとずれた
要人、客人との会話に立ち会い通訳をす
る。自然様々なことを耳にする機会が増
えていく。

多くの歴史小説の主人公が時代の変革
期に立ち会い自ら戦いや事件、騒動に関
わっていくのに比べ事件や変化はきわめ

てすくない。

志津が心ときめかすのは淡いあこがれ
を抱く執政の息子が土手の道を馬で駆け
ていく姿を見るとときであり、心痛めるの
は病で父が倒れた時だ。全編ほのぼのと
した挿話が続く。

それでは実際に何が語られているのか
見ていこう。

冒頭、志津は早曉諫早を流れる大川、
本明川の土手にいる。漁に出た船が有明
海から河口を遡って帰ってくるのを眺め
に来ている。

書き出しはこうである。

「まつさきに現れたのは黄色である。

黄色の次に柿色が、その次に茶色が一
定のへだたりをおいて続く。

堤防の上に五つの点がならんだ。」

見えてくる色は漁船が張っている帆の
色だ。

父に伴い伊佐早氏が築城したという古
城を測量に伴う。そこで本書の題名になつ
ている諫早菖蒲を見つけて持ち帰る。

海の幸、川の幸をもたらしてくれる本
明川が長雨で決壊氾濫し多くの人が亡く
なり川面を漂い家屋が流される。195

7年の本明川の氾濫を野呂は見ている。それを重ね合わせたのだろうか。

佐賀藩の圧政に耐えかねた藩士が鍋島藩の郡方役人に切りつける。役人は一命を取りとめるが刀をふるった藩士は切腹を命ぜられる。作平太はその見届け人となる。志津は最後に出された食事をたずねる。お酒、鱈の煮しめ、鯛の吸い物など二汁、五菜であった。普段口にする。ことのない最後の馳走に、切りつけた野村六兵衛は笑みを浮かべ冥途へと旅立っていく。

古城のそばの寺の神職が藤原家を訪れ、わずかな畑地を召し上げられそうになっていると訴える。鉄砲方の相役、西村氏との差し金らしいが父にはどうしてやることもできない。その後、調練の際父は右手に火傷を負う。それはわざとであり、新式銃の必要性を説く意見書を出すもくろみであったことが明らかとなり叱責を受ける。

鍋島藩の大調練ののち、鍋島氏は諫早藩により蛍見物をされることになり、娘たちが接待に駆り出される。志津もその一人であった。だが思いを寄せる人の姿

に心を奪われ蛍狩りのことはついぞ覚えていないのである。

本名川を鯨が遡ってき、漁師たちが色めき立つ。志津の幼馴染、浜兵が背に乗ってとどめを刺し喝采を浴びる。

父が河口の葦原に雉撃ちに行くのに志津もついて行き、旧式銃で撃ち損じ父が消沈して帰るのを見る。吉は手製の雉笛を吹き父にもう一度と勧めめるが父に叱られる。

吉は土竜を捕まえるよう命じられ、何に用いるのかと首を傾げる。父作平太の狙いは干した土竜を蒸し焼きにし、ある種の毒薬を作ることにあつた。新式銃が買えない苦渋の策である。

藤原家で鉄砲方の寄り合いがおこなわれ、母は苦しい家計のなから精一杯のもてなしを用意する。藩内でも母の手打ちのソバは評判が高いのである。寄合では各々が決意のための血判状に署名する。志津は宴が終ったあとに血の付いた懐紙が落ちていたのを見る場面がある。野呂は血判状を目にしているようだ。

もてなしのため購う魚の呼び名も面白い。チヌ、ボラ、クチゾコ、川エビは夕

クマンチョとふりがながある。あとになるほど下魚あつかいだ。クチゾコは舌平目のことでもなかでも下魚なのである。余談だが私の田舎で舌平目の事を「ニンスル」と呼ぶ。やはり下魚扱いである。

とらは伯父上の仲間と祝言をあげることにになり、ひとり身の吉を案じ志津は後添えを探してくれと父母に訴え、二人は芝居めいたやり方で吉に後添えを貰うことを承知させる。鉄砲に使う硝酸を造るための水車と煙硝蔵を作ることになり、父は水車の建造を命ぜられる。予算内に収めるため正式の木工ではなく吉爺の親しい船大工をもちいて期日予算内に収める。

最後の場面も印象的だ。ようやく新式銃導入がなり、作平太は娘志津と中間吉を伴って川原へ雉撃ちに行く。先だっては旧式銃で外している。吉は梅干しの種の中を抜いて穴をあけた雉笛を持つてきている。雉が仲間と間違えて飛び出すのだという。

「吉爺は唇に指をあてて前方をさした。父上は新式銃に弾をこめられた。私は耳をふさぎ、考えなおして手をおろした。

新しい鉄砲の音を聞きたかった。

高く低く雉子笛が鳴った。」

写実的でありながら印象的な終わり方だ。

あらすじで「諫早菖蒲日記」を語るのは難しい。何気ない風物や日常の小さな出来事に心動かされる志津の心の細やかな描写にこそ作品の魅力がある。事実、野呂は講演のなかでこう述べている。

「どんな三文映画、三文小説にも必ず一カ所は素晴らしいシーンがある。映画も小説も同じ、何と書くかより、いかに書くかが大事、描写が全てなのだ」と。

物語を支えるのが細部の描写であり、その描写を担うのが言葉だ。生き生きとした言葉で書かれているからこそ魅力的なのだ。諫早の古い方言を活かして描かれた「諫早菖蒲日記」はまさにそんな作品である。読者の耳元に「吉よい」と無心に問いかける志津の声が聞こえてくる。

志津が通って洗い清め藁で拭きつてきれいにする地蔵に願う密やかな想いであったり、佐賀表に出立する兵たちを乗せた船を見送った後で見つけた廃船をみながら想う事柄であったり、日々のささやかな風景や想いが丁寧に綴られ一つの物語

に編まれている。そこからは時代に翻弄されながらも懸命に生きている一人の少女の息づかいがきこえてくる。

胸躍らせるような冒険談や驚く出来事が次々と起きる読み物もいいが、些細な事柄でも人の生活に関わる眼差しが伝わってくる物語もいい。そのほうが心に沁みるのではと本書を読んで思う。

志津は父や母から教養を受ける。それは滅んだ伊佐早氏の歴史であり、藩の苦しい台所事情だったりする。吉爺からは海をいく爽快さや苦勞を聞く。そして遠く離れた外国に想いを寄せるのである。伯父からは粟粟の子房から阿片を採る方法も習っている。

父から本明川の改修工事が捗らぬ嘆きを聞き、西洋の驚異に対する手だてとして新式銃をそろえられぬもどかしい嘆きを聞く。父の苦惱、苦勞は全て貧しさから生じている。

志津を奥女中にと奉公を命じられ母は慌てる。志津は婿取りの大事な一人娘だ。そのようなことも志津は聞いているのみだ。自らの意志を鮮明にはできない時代だから。

「諫早菖蒲日記」の冒頭で主人公の志津は本明川の土手にたつて漁師たちの船が戻ってくるのを見たが、野呂の他の作品でも主人公が本明川の河口を見る場面が描かれている。野呂自身の視線が体験としてあったのだろう。それだけでなく好んでその場を訪れたらと思うせる描写だ。

野呂邦暢は詩人の資質を持った書き手でもあった。若き日に同郷の詩人伊藤静雄に触れ自ら詩作を試みている。詩的な表現を好むというより描写がおのずから詩的表現になつてしまう。場面、場面を詩的な言葉で紡ぐ、そのような資質なのだ。

作品を書く際には自らの体験を言語化するという作業を避けてはとおれない。想像力をどれだけ遅くしても、見たこともない世界や場面を描くのはたやすくはない。作家は自らが体験した事柄を、どんなにささやかな体験であれ手がかりにして言葉を探り紡いでいく。その意味において野呂は「見る人」であった。ささいな体験を心にとどめ、言葉で鮮明に再現できる写生的でもある作家だったと彼の残した作品を読んで感じる。それは

得難い才能であり、ある意味書き手を苦しめる才能でもあっただろう。

「諫早菖蒲日記」を読んでいて感じるのは、氏の紡ぐ世界が心地よいことだ。鮮明でありながらしなやかで柔らかな、慎ましさを感じさせる。抑制が利き言葉少なだが奥行きを感じさせる表現。短い文章で適切な描写を心掛けるのが野呂の本質だった。本書から数行にわたる長文を探し出すのは容易ではない。そこにはある種のリズム感が生まれてくる。音楽を耳にして感じる心地よさに通じるものがある。野呂の文章には情感をたたえた「潤い」があるのだ。

野呂は高校時代、美術部に所属していた。絵を描くように野呂氏の文体は写実的、写生的でもある。視るといふ行為はまず対象物から距離を取ることからはじまるのだろう。対象に近づきすぎではかえってよく視られないからだ。対象から離れるところから「見る」行為ははじまる。それには物理的であっても、心理的であっても対象から離れるという作意が働く。それは孤独感を生みほしくないだろうか？ 距離を置き視ることに徹する。

それは野呂が若き日に選んだスタンスであったように思える。生き様と言ってもいい。禁欲的とも思える立ち位置が初期の作品にはうかがえる。それなのに「諫早菖蒲日記」ではその距離感を近くして、ある時は渦中に身を投ずるかのような気持ちがあるように思われる。

交わって共感し喜び悲しんで生きるというごく普通でありふれた日々の過ごし方がそこには綴られている。

古文書に息を吹き込む過程で野呂は自らを律してきた生き方をゆるめ、書くことを楽しんでるように思えてくる。単純な、ありふれた、それでいて確かな輝きにやっと気づいたかのように。もちろん冷静な視点はゆるがせにはしていない。けれどそれまでの視ることの先にある不毛、実りのなさを忘れて楽しんでいるかのように思えてくる。

「諫早菖蒲日記」を書き終えた時点で残りの刻が少なくなっているも、それは野呂という小説という虚構に賭けた一人の作家の勝利だったと思いたい。それは野呂邦暢がそれまで引きずってきた軛から解放された瞬間だったのかもしれない。

野呂がはじめて書いた小説は「壁の絵」であり「棕櫚の葉を風にそよがせよ」にも絵を描く女性が登場する。主人公はあらいながらも絵の世界に心惹かれていく。絵を描くという行為は眼に見えるものをキャンバスに再現し構築しなおしていく作業だろう。野呂のまなざしには絵画的な視点がある。ある種、宿命的な特徴だったとも言えるほどに。その絵画的な視線は「諫早菖蒲日記」でも随所に現れている。

河口に迷い込んできた鯨を若い漁師の浜平が飛び込んで鯨の背によじ登り鉞を刺してとどめを刺す場面がある。第二章の一番盛り上がる場面である。

「浜平は鉞をにぎってさらに深く鯨の腹中へ突き通した。鯨はもがいた。水に沈む鯨は失ったかのように見えた。船からとびこんだ他の漁師たちが泳ぎついて、鉞にとりつき浜平とともに深く刺した。鯨は最後に大きくひれで水を打ち体をのたうたせた。しづきがあがり、そのこまかなしづきに一瞬、小さな虹がかかった。鯨は水面にながながと横たわった。思ったより小さく、長さは三間あまりの背美

鯨である。」

「白鯨」を思わせるような場面だ。作者は鯨がもがいてひれで打ったしぶきにかかる虹をその目で見ているのだ。

吉爺は昔取った杵柄で漁師たちを指図していた。けれど捕れた鯨はわけてもらわない。代わりに鯨の脂身を煮詰めてとれる油をもらい下げる。父親が夜、書き物をするさいのあかりに用いるのである。油が届けられたとき

「私は甕を胸に抱いて『吉よい、でかした』といった。吉爺は完爾として『漁師どもが吉めにした仁義でござんす』と言った」

読み進めるうち気づく。

「技法」と言っているいかどうか、物語が場面転換する際、空白後の新たな節のはじまりがごく短く言いきられていることが極めて多い。野呂の文章は基本的に短文の積み重ねだが、なかでも一行目が短いのが特徴的だ。第一章を見るだけでも十数か所に及ぶ。

諫早に建立された氏を忍ぶ石碑にも掘られた物語の冒頭に行

「まっさきに現れたのは黄色である。」

他にも

「朝、起きぬけに私は裏庭に行った。」

「今日、雄齋伯父が見えられた。」

等々全編に及ぶ。物語が新たに展開する際、作者は意図的に簡潔な文を用い短く言い切ることにより、読者を物語が語られる場面へとつれていく。リズムカルなストーリーの切り替えをそのような技法で行っている。それにより物語は軽やかに場面転換を行い、語り手のいる場所に読者を誘う。それは意図した技法とは言えないかもしれない。が、そのように書くことによつて物語が引き締まり読者が作品に引き込まれていくと、野呂は本能的に知っていたのだ。

たとえば冒頭の一行をこうしたらどうか。

「私は本名川の河口に立っていた。朝出た漁師どもの船が帰ってくるのを見たかったのだ。船の帆が見えてきた。まず見えたのは黄色い帆だった」

臨場感も余韻もまるで違ってくる。

諫早弁で会話が成り立っているのも特色だ。作者はながらく諫早で暮らし古語ともいえる言い回しに親しんでいたものであろう。

「吉よい、今夜の大潮は何時どきかん」

と母上がきかれた。

「おおかた四ツ半どきと心得とります」

吉はかつて測量におとずれた伊能忠敬の使う測量縄を綯ったのが自慢である。

縄を綯う名人なのだ。その伊能について志津がたずねるとこう答える。

「えろう足の速か方でしたと」吉爺は手を休めずに答えた。もうすぐ七十に手がとどこうという御年配であるのに、「山でん川でんどんどん走りでござんす」

このような方言が全編におおらかで親しみやすい雰囲気醸し出し、貧しく厳しい日々の営みをやわらかく包みこんでいる。

自然描写が随所にあられるのも特徴だ。

本書の題名となった「諫早菖蒲」は、今は忘れられた古城のありようを探りに行き（父作平太は藩史編纂も仰せつかつている）古い石組みの間に自生する菖蒲を持ち帰り自宅の庭に植えることからとられている。

諫早菖蒲は菖蒲の原種で野生のまま手を加えられていないので、花びらは小さいわりに葉身が大きく強く、少々の日照

りにあつてもしゃんとしている。花びらのいろどりはやや淡いが、江戸菖蒲のように一、二日でしおたれない。

「葉がまつすぐに突つ立つておる。そこがよかところたい」

主人公志津の手柄をおもわせる花だ。その菖蒲を志津は庭の一角に植えて丹精込めて育てるのである。

「朝、起きぬけに私は裏庭へ行った。きのう、平松神社の境内のすぐ近くをながれる小川のほとりにひとむらの菖蒲を見つ、根ごと掘り取つて移し植えたのである。裏庭のすみにほかよりは低い湿地があり、真夏でも土は黒い。持ち帰つた時刻に花はしおれてしまつたが、いまあらためると再び生色をおびてみずみずしい紫色で目をたのしませる」

自然を見つめる作者の視線がうかがわれる。草木だけでなく動物や川の流れ風や雲の動きにも少女の曇りのない視線はそそがれている。

花菖蒲は江戸時代に改良されて広まつたと聞く。江戸系、伊勢系、備前系など二千種に及ぶ品種が栽培されているといふ。濃い紫や薄い物、花びらを大きく広

げた華やかなものなど、数多くの品種がある。そのなかでも慎まし気ですれでいて芯の強さを感じさせる諫早菖蒲は本書にふさわしい花だ。

野呂氏が借りた家屋は取り壊されたが、今でも諫早菖蒲はかの地で大切に育てられていると聞く。

諫早では野呂を忍んで毎年五月に「菖蒲忌」が営まれている。

本書の主人公を十五才の娘とし、一人称の語りとしたことで作品に活気が生まれたとすでに述べた。そうでなければいかに丁寧な史実をもとに忠実に書いたとしても、歴史の片隅の無味な記録に終わつてしまつていたかもしれない。好奇心にあふれる、女性ゆえ表に出ることのない若い視点から、その日常を見つめた物語とすることによって、生き生きとした血脈が通う時代をこえた世界を作りえたのではないだろうか。志津の視点からの一人称の語りに行きついた作者の胸のうちを想像する。それだけで事は成つたと思えるほどの、それは優れた仕掛けだった。

歴史小説は通常三人称が一般的だ。一

人称にすると描ける範囲が狭まってしまう、物語を広範囲にわたつて描くことが難しくなる。その点三人称にすれば様々な人物の視点からそれを描けるからだ。

だが「諫早菖蒲日記」はその欠点を逆手にとり十五の少女の視線に固定することでリアリティを増やし、父の元を訪れる人々の言葉が主人公が傍らで聞いている設定にして、ひとりの娘の日常生活を超えた世間の動きを描けるようにすることで、時代のうねりをも描き込むことに成功している。そもそも歴史に名を残した傑物を主人公にはしていないのだ。その割り切りこそが成功している秘密の一つだろう。

ただ、主人公の可憐さや奔放さ、活発で好奇心旺盛な性格は作者のある種理想を反映したものとも読める。出来すぎな主人公だと。が、そもそも小説とはそのようなものではないだろうか。作者の理想を反映させて読者の共感を呼ぶ。

司馬遼太郎の「竜馬がゆく」の坂本龍馬はあきらかに作者の考えや理想が加味された人物像である。他の作者の書く龍馬とは一線を画する爽やかさをたたえて

いる。それを史実とは異なるると異議を申し立てるのは野暮だろう。作者が熱を込めて描いた理想像だからこそ人の心を打つのだ。

野呂の言葉はやさしい。同じように地方で書くことを選んだ丸山健二の同じく簡潔で感傷を廃した言葉が、その根底に男性的な激しさを秘めているのとは対照的だ。そのあたりに人柄が現れているのだろう。野呂の視線にやさしさを感ずる。「諫早菖蒲日記」にもそのやさしさはあふれている。ただのやさしさではなく人が生きていくことの辛さと苦しみを知る人のしたたかさを併せ持った「やさしさ」なのだ。それがあるからこそ慎ましい日々の営みが忘れられない印象的な物語として伝わってくるのだろう。

その「やさしさ」は野呂が愛する故郷「諫早」を舞台にしたとき最大限に發揮されるのかもしれない。

野呂の「やさしさ」について述べたついでに、本書の帯にもあった「透明な文体」について考えてみたい。たしかにそういう印象を受ける文章はある。

透明感を感じさせる文章、文体とはま

ず的確で無駄のない、それでいて平明な言葉で書かれた文の事だろう。それでいて余韻、趣を感じさせるものでなくてはならない。それには物語の場面、情景がありありと読者に伝わる必要がある。読んで自然と場面が浮かんでくるような文章、それは言葉一つ一つの粒、言葉が持つ喚起力をそえる必要がある。もちろん美文の事ではない。簡潔で日常的な言葉を使いながらも奥行きを感じさせる統一感ある文章を「透明な文体」と呼ぶのかもしれない。野呂の作品はそう呼ばれるのにふさわしいものだった。

「諫早菖蒲日記」は歴史小説であるとともに青春小説でもある。十五歳の少女を主人公として彼女の視点、語りで綴られた物語という点で充分青春小説としての骨格を備えている。けれど現代を舞台にした小説とは異なっている。作中に主人公志津の友達が出てこない。わずかに親藩佐賀表から訪れた鍋島少将様の蚩狩りの接待に選ばれた同じ年頃の少女たちと言葉を交わす場面が描かれているだけである。普段の行き来は無いに等しい。

スマホも電話もない時代であり、なににより娘が一人で出歩くこと自体はしたくないと思われた時代なのだから。

蚩狩りの接待時に指南をした奥女の教えがおもしろいのでついでに引き写しておく。もてなしの心がまえを解く場面である。「だらりの話」だ。

「急々、だらり急、急だらり、だらりだらりの順だと教えられた。急々はことを申しつけたときもよく承知し、りっぱにやつのける。これは上々である。だらり急はいいつけたときはさほどさほど気がきかないが、ことは手早くそつなく片づける、急だらりはのみこみは早い、やることは手ぬるい、だらりだらりはのみこみも手くばりも遅い。

『急々を心がけてようやくだらり急を果たすものぞ、鍋島様にお目見えかなうことは家門の誉れ、このこと肝に銘ずべし』と教わるのである。

話はそれだが、当時の武家の息女は不自由な毎を送らざるを得なかったのだろうと想像する。その不自由さを補うのが中間の吉爺いであり下女のら、それに何くれとなく心遣いを見せてくれる伯

父の蘭学医雄斉である。雄斉伯父は減俸で新調できなくなった志津の矢舁の反物を購ってくれ、生活の苦しい藤原家を助けて「洪柿」を集めておけ、という一見もくろみの分からぬ指示を出す。

柿洪は思いもかけない利用法で藤原家の家計を助けることになる。樽や瓶に八つも柿洪をためて藤原家は窮地を脱する。その洪を取るに当たって志津も力を込めて柿の実をつぶす。苦しさにめげず明るさを持ち続ける生き様がユーモアを交えて描かれているのも「諫早菖蒲日記」の特徴であり、読後感を明るいものにしていく。

雄斉伯父は野呂の創作である。新居として選んだ古屋は砲術指南役の娘の住んだ家であり、その筋向かいに御殿医の家筋でのちに志津は嫁に行くことになる。それを野呂は藤原家の伯父で窮地を何くれとなく助ける人物として造形したのである。

「諫早菖蒲日記」は全編おおらかな明るさが溢れている。それまでの野呂の作品は異なっていた。おそらくは氏自身がモデルと思われる登場人物があるときは

孤独に、哲学的に思索し、河口に集う鳥たちを眺め、芥川賞受賞作である「草のつるぎ」でも厳しい訓練に耐える日々が内省的に描かれている。それらと「諫早菖蒲日記」から感じる大らかさ、牧歌的ともいえる生への肯定感には隔たりを感じる。

それまでの諸作で野呂は禁欲的なままでに言葉を選び、物言わぬ風景や人や鳥を描き、それゆえに独自の透明で絵画的な世界を築いてきたのだが、本作では平明平易で庶民的ともいえる言葉使いを積極的に取り入れ物語の語り部に徹しているかのようだ。この変化はいかなるきつかけから生み出されたのか、土地神に見込まれたとも言えはいいのだろうか。

妻を娶った喜び、生活の充実だけでは語れないものがある。古文書に息を吹き込む過程で野呂は自らを律してきた生き方をひと時緩めて書くことを楽しんでいくようにも見える。ありふれたそれでいて確かな輝きに気づいたかのように。

蛇足になるが、「諫早菖蒲日記」が出版された一年後に野呂は離婚する。その後、氏の上梓する作品は真摯だがどこか

悲壮な想いを秘めた登場人物が出て来る作品ばかりとなっていく。離婚に至った哀しみがそうさせたとは、皮相な見方だろうけれど。

本書には後日談といえる作品がある。

「火花」という短編は明治維新後の長崎が舞台であり、後年嫁して母親となった志津が、年老いた父が依頼されてはるばる長崎を訪れたグラント將軍を迎える火花を打ち上げることに、父の晴れ舞台を温かな目で見守るという物語である。新たな登場人物として幼い娘「むめ」がいる。この子がまた利発でけなげでいい。文庫版の「諫早菖蒲日記」には「火花」も収録されている。あわせて読んでいただきたい作品である。

冒頭に佐藤正午氏のエピソードを紹介した。もう一人「諫早菖蒲日記」に魅了された人がいる。同じく直木賞作家の向田邦子氏だ。

向田は文藝春秋社で当時、野呂を担当していた豊田健次に「なにかこう、心にしみるような小説ないかしら」と問うた。

そこで豊田は「私はチューチョコなく、野呂邦暢の『諫早菖蒲日記』をおすすめした」豊田は多忙な向田さんのことだからなかなか読んでほしくないだろうと思っていた。ところがすぐに反応があり、「素晴らしい、とても感動したというのです」

「野呂さんて、男性なのに、どうして女の子の気持ちがこれほどまで、わかるのかしら。この志津さんが、とっても魅力的。文章がみずみずしくて、読んでいるこちらまで、すつきりとすがすがしくなるようだわ」と読後感を語っている。そしてこの「土地の精霊の加護を受け」「あたかも土地の精霊と合体」したかのような作品を、みずから手でドラマ化したいと言いだした、とある。

しかし激しい合戦も男女のカラミもない「諫早菖蒲日記」のドラマ化は見送られた。かわりにもう一つの野呂の歴史小説「落城記」がドラマ化されている。それで評判がよければ「諫早菖蒲日記」もというもくろみであったそうだ。

昭和十五年四月末に野呂邦暢と向田邦子は六本木で対談している。それから

数日後に野呂邦暢は急逝する。翌年八月に飛行機事故で向田邦子も帰らぬ人となった。「諫早菖蒲日記」はドラマ化されぬままである。

評論家川村二郎氏は野呂への追悼文でこう表現している。

「静かで簡潔な文体、しかも心づかいの深さがある。それが野呂氏の文学の本質的な特性であったと思われる」

故事をひいたが多くの人々を魅了した一端を知ってほしかったからである。

野呂の書く小説はそれまでいざれも作者本人の面影を宿したどこかペシミズムを感じさせる主人公ばかりだった。語り手が女性ということはあったが中心にいるのは鬱屈した影をやどした男性ばかりだった。しかし「諫早菖蒲日記」はそうではない。ペシミズムとは無縁の明るい活動的な若い女性を主人公に描くことよって作品は青春文学として成熟させている。野呂の言葉は実直、誠実で、大げさな人目を牽く表現を避けた地に足が着いた言葉である。それでいて爽やかで瑞々しい読後感をもたらす。それを文才と言

うだろう。現実には常に猥雑で酷薄で雑言雑音に満たされている。詩人の目を心を持ってしても、そうであるからこそ耐え難い側面を持っているように思えただろう。

「諫早菖蒲日記」は執筆時百二十年前に生きた人々の物語だ。詩人は刻をさかのぼることによってその猥雑さを克服できたのではないだろうか。つまり時がその猥雑さを濾過してくれたのだろう。それが他にない成熟を作品にもたらしているのである。

その後、野呂は同じく歴史小説「落城記」を書くが、その後はずっと囚われていたテーマにと戻っていく。成功に味をしめて類型的な作品を書くことを自らに戒めているかのように。それだけ「諫早菖蒲日記」は希有な出会い、成り立ちであったと言えるだろう。

「落城記」の他数編の歴史に材をとった作品を書いたのち、野呂はガダルカナル島で死闘を繰り返して亡くなっていった兵士たちの私記を扱った「丘の火」や未完に終わった原子爆弾を取り上げた「解纜（かいらん）のとき」など他方面にわたり書きついでいく。それだけ書きたい

題材が多かったのでもあろうし「諫早菖蒲日記」が他に比べ特殊な成り立ちで書かれた小説であったとも言えるだろう。野呂邦暢は江戸時代の終わりに生きた人々を一人の少女の視線を借りて描いた。そこに流れる時間を、読者は主人公に寄り添って読み進め、もう読み終わってしまったとため息をつけばいいだけなのだ。

ここまで思いつくままに書いてきたが「諫早菖蒲日記」の成り立ちについて整理してみたい。

転居した先が江戸時代の諫早藩の砲術指南役の家で、資料、血判書や武具などもそろっていて興味をそそられた。つまり幸運な出会いがまずあった。

舞台が自身愛する諫早であった。そして当時話されていた江戸時代の人々の話し言葉を、祖母などの記憶から再現したこと。

主人公を当時十五歳の多感な娘にし、多感で感じやすい年代の少女が見た江戸時代の物語とした。主人公は耳が遠くなった父のそばで訪れた人たちとの会話を伝える役として、少女が外の世界を知ると

いう仕掛けを作った。

物語の時代背景が西洋の列国が開国や取引を迫ってくる変化にとんだ時代で、それは小さな支藩である諫早藩にも影響を与え、武家の娘の生活にも否応なく影響を及ぼしていたこと。

少女の視線に寄せて野呂が感じていただろう諫早での心情や豊かな自然の営みを盛り込めたこと。

比較的身近な体験を素材として書いていた作者が、およそ120年前に生きた人々という隔たりが逆に物語を濾過し一種の熟成効果が働いてまろやかな世界を醸成できた。必ずしも晴れ晴れとはしていなかっただろう作者の想いを棚上げにし、自由に想像できる機会だった。それでも一冊の物語に仕上げるまで三年を要した。幸運な出会いを活かし諫早を愛し、諫早で生きた野呂だからこそ書けた物語なのだ。

野呂邦暢は生涯諫早を愛した諫早の人だった。

付記

鈴鹿市立図書館収蔵の「諫早菖蒲日記」

は十年ほど前、没後三十年記念として出版されている。諫早高校の同窓生で同じ美術部で絵を描かれた荒木幸二氏がカバー絵を描かれている。氏はコスモスしか描かない稀有な画家だそうだ。

鈴鹿市立図書館の「諫早菖蒲日記」はスピン（しおり紐）が中ほどに丸まったまま挟まれていた。読まれた形跡はなかった。この文章を目にされ興味をもたれて「諫早菖蒲日記」を手に取られる方が現れればと思う。

参考資料

諫早菖蒲日記

野呂邦暢小説集成 1〜9 文藝春秋（1977）

文游社（2013〜2018）

野呂邦暢作品集 文藝春秋（1995）

落城記 文春文庫（1984）

鳥たちの河口 集英社文庫（1977）

それぞれの芥川賞 直木賞 豊田健次

野呂邦暢

野呂邦暢

野呂邦暢

野呂邦暢

野呂邦暢

野呂邦暢

彷徨と回帰

文春新書（2004）

中野章子

西日本新聞社（1995）

野呂邦暢・長谷川修往復書簡集

葦書房（1990）